

# 外国語指導助手 (ALT) が抱えるフラストレーションの実態

—ALTへのインタビュー調査をもとに—

The present situation of ALTs' frustrations - based on interviews with ALTs -

田村 駿<sup>1</sup> ・ 山下 直子<sup>2</sup>

## 1. はじめに

「語学指導等を行う外国語招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Program 以下「JETプログラム」とする)は、1987年から実施されている。JETプログラムのホームページによると、日本全国の小学校、中学校や高等学校での語学指導、各自治体の国際交流事業に携わることにより地域の住民と様々な形で交流を深めることを目的としている。このプログラムを通して全国の小中高校に、外国語指導助手 (Assistant Language Teacher 以下「ALT」とする)が派遣され、2014年7月1日現在では、4101人のALTが日本で活躍している。英語母語話者であるALTが英語教育に参加することにより、生の英語に触れる機会が増えるだけでなく、国際交流・国際理解教育の促進に大きな効果がある。文部科学省が児童・生徒の外国語能力向上のため設置した「外国語能力の向上に関する検討会」は、『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーションの育成に向けて～』(2011)を公表し、3つ目の提言で「ALT、ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす」としている。その中で、ALTは、児童・生徒が授業で生きた英語に触れたり、実際に英語を使ったりする機会の充実に資する重要な存在であると明記されている。

一方で、日本人英語教師 (Japanese Teacher of English 以下「JTE」とする)とALTが共同で行う授業のための教材不足や、有効な教授法の未確立、現行の教科書との関連性の不足などの新たな問題が浮上している(足立・戸田1996)。大谷(2007)などのように、文化的に背景の異なるJTEとの仕事や日本と出身国の学校文化の違いが引き起こすトラブルやALTのフラストレーションなどに関する先行研究もある。授業内外を問わず、生徒への指導や関わりに関して、悩みを抱えている、もしくは抱えていたALTは少なくないと考えられる。そこで、本研究では、現職のALTが抱えているフラストレーションやトラブルを明らかにし、それらをどのように解決したのか、または、どのように解決に苦悩し工夫しているのか実態を明らかにすることを目的とする。

JTEとALTの間の人間関係は、異文化理解能力、積極的なコミュニケーションや相互の理解を通して円滑に形成できると考えられる。しかし、教師と児童・生徒との適切な距離を保つ上でのトラブルや問題行動を起こす生徒への対応は、様々な場面で起こり、JTEが把握することや解決する

1 岡山県立岡山一宮高等学校

2 教育学部国際理解教育講座

ことが難しい場合も考えられる。本研究で具体的な事例に基づく分析を行うことは、ALTと話し合い、予防の手立てや具体的な対処法を見つけるための貴重な資料になるものと考えている。また、JTEがALTから信頼を得ることで、授業が円滑に進むことが期待される。さらに、日本人教員では気づきにくい学校現場における異文化的な側面を捉え直す機会にもなると考える。

## 2. 先行研究

Team-Teaching (以下「TT」とする)に関する先行研究で、レオナルド(1994)は、TTの基礎の一つとして、JTE・ALT両者が、文化や個人を通して互いを理解する努力をすることがTTにも深く関係していると述べている。布川(2012)もALTを活用したTTを行う上で、ALTとの人間関係作りの重要性に触れている。放課後に授業以外のことを話すこと、プライベートでの親睦を深めること等、日頃の関わりが問われると述べている。効果的なTTを行う上で、JTEとALTの人間関係が非常に重要な要素となる。また、今井・松井(2008)は、TTがうまくいく関係性は、学習者をJTE、ALTと他の生徒たちの三者が支える関係性とし、ALTとJTEの双方が相手頼みではなく生徒と直接関わり、生徒たちの英語力や教室での様子を理解する関係性を築くことが必要であると述べている。

ALTとJTEは良好な人間関係作りに努めなければならないが、ALTとJTEの異文化コミュニケーションにおける障害の問題もある。Kobayashi(1994)は、アンケート調査を通して、AETとJTEが確認した障害を分類している。そして、ALTへJTEの話を注意深く聞くことや、表現方法に工夫をするなどの提言を、JTEには、Yes/Noをはっきり示すことや、様々な情報をはっきり伝えることなどの提言を行っている。また、大谷(2007)は、ALTとJTEの間で起こり得る誤解や摩擦の要因に、日本の学校文化に関する異文化的要因や学校現場での異文化コミュニケーションの他にも、様々な文化的・社会的・個人的な要因が影響を及ぼすことを明らかにし、両者を取り巻く様々なマクロ的要因と、日本人教員とALT個々のもつミクロ的要因をまとめている。

さらに、児童・生徒との関係に関しては、Tsuido(1997)、Tsuido・Otani・Davies(2012)が、ALTへのアンケートで、生徒・同僚・上司・JTE・学校外日本人とのコミュニケーションで直面するであろう葛藤場面を10設定し、フラストレーションの度合いを調査したところ、授業中の妨害行為を働く生徒への指導の場面が、最もフラストレーションの高い場面として選ばれた。JETプログラムALTに配布される『JET参加者用ハンドブック』(CLAIR 2013)では、授業中の妨害行為への対処法やトラブルとその解決の糸口として、JTEへの相談という文言が頻繁に見られ、ALTとJTEとの関係が児童・生徒とALTの関係を左右することが分かる。

## 3. 研究目的

以上のように、TTを行う上で、JTEとALT両者の人間関係が非常に重要になるが、その関係作りには、異文化コミュニケーションの障害をはじめとする様々な問題がある。また、大谷(2007)が述べるように、ALTとJTEの間で起こり得る誤解や摩擦の要因は非常に複雑であることが明らかになっている。しかし、TT、JTEと生徒とのコミュニケーションにおける問題やストレス、その予防策に関しての調査は行われているが、実際にALTが抱えている問題や予防・解決への工夫・苦勞、また、それらの問題が他の問題とどのように関連しているのかに関する調査はほとんど行われていない。そこで、本研究では、香川県内のALTへのインタビュー調査をもとにALTが抱えるフラストレーションの実態を探る。具体的には、次の点を明らかにすることを目的とする。

- (1) ALTが抱えている教員と児童・生徒との関わりにおける悩みを明らかにする。
- (2) ALTがフラストレーションやトラブルをどのように解決したのか、または、どのように解決に苦悩し工夫しているのかを明らかにする。

#### 4. インタビュー調査の概要

##### 4.1 調査方法

インタビュー調査は、一対一、もしくは、一対二の対面で行い、時間は約45分程度であった。半構造化インタビューであり、調査対象者の話し方に合わせ質問の順序や質問内容の変更等を行って柔軟に対応し、協力者が話しやすい雰囲気留意した。調査に先立ち研究概要・目的について説明し、協力の了承を得た。回答は、了解を得てICレコーダーで録音するとともに、メモをとった。インタビューに用いた言語は英語を使用した。インタビューを文字おこし日本語に訳したものとメモを分析に用いた。

##### 4.2 調査対象者

調査対象者は、香川県内のALTの男女10名である。調査対象者の内訳を表1に示す。ALT10名の性別は男性6名女性4名、年齢は20代から30代、出身国・地域はニュージーランド3名、スコットランド2名、アメリカ合衆国2名、イギリス2名、カナダ1名である。派遣校種は小学校・中学校の2校種が8名、保育園・小学校・中学校の3校種が1名、中学校のみが1名である。JETプログラム参加期間は4か月から2年半である。

表1. インタビュー調査対象者の内訳

調査協力者	性別	年代	出身国・地域	派遣校種	参加期間
A	男	20代	ニュージーランド	中学校	1年半
B	男	20代	スコットランド	小学校・中学校	2年半
C	女	20代	スコットランド	小学校・中学校	1年半
D	男	20代	アメリカ合衆国	小学校・中学校	4ヶ月
E	男	20代	カナダ	保育園・小学校・中学校	2年半
F	女	20代	イギリス	小学校・中学校	1年半
G	女	30代	ニュージーランド	小学校・中学校	4ヶ月
H	女	20代	アメリカ合衆国	小学校・中学校	1年半
I	男	20代	イギリス	小学校・中学校	2年半
J	男	20代	ニュージーランド	小学校・中学校	4ヶ月

##### 4.3 インタビュー項目

インタビュー調査票の内容は、年齢、国籍、性別、大学の専門科目等のバックグラウンドを尋ねたフェイスシートと次の4項目からなる。項目1で生徒・JTEとの良好な関係作りに心掛けていること、項目2で学校全般におけるフラストレーションの実態と見解、項目3でJTEや他教員に対するフラストレーションの実態と見解、項目4で生徒に対するフラストレーションの実態と見解を尋ねた。

#### 5. 結果と考察

##### 5.1 教員に対するフラストレーション

インタビューで得られたフラストレーションの要因を、教員に対するものと児童・生徒に対するものに分けて、それぞれ結果と考察を述べる。まず、JTEまたは教員に対して感じるフラストレーションの要因をキーワード化し、「授業」と「授業外」の2つの場面に分けてまとめたものを表2に

示す。以下、表にまとめたキーワードは、【 】を用いて示す。

表2. 「授業」と「授業外」でのJTE/他教員へのフラストレーションの要因

調査協力者	「授業」でのフラストレーション	「授業外」でのフラストレーション
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 授業中の放置</li> <li>・ アドバイスを受け流す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他教員との距離</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 急な依頼や変更</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 無関心・非社会的な態度</li> <li>・ コミュニケーション不足</li> <li>・ 不十分な生徒指導</li> <li>・ 相談しても何もしない</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語力</li> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 教科書へ焦点を当てすぎた授業</li> <li>・ 授業中の放置</li> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> <li>・ 生徒との関わりが少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語力</li> <li>・ 相談しても何もしない</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語力</li> <li>・ アクティビティー未活用</li> <li>・ 授業中の英語が少ない</li> <li>・ レッスンプランの準備無し(小)</li> </ul>	該当なし
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> <li>・ 生徒指導の依頼</li> <li>・ 教科書へ焦点を当てすぎた授業</li> <li>・ 授業への熱の無さ(小)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教室外で英語を使用しない</li> <li>・ 生徒指導の不十分さ</li> <li>・ 教師の諦め</li> <li>・ 教員との距離</li> <li>・ 非社会的な態度</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒指導の依頼</li> <li>・ 英語力</li> <li>・ 授業への熱の無さ</li> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 授業を全て任される(小)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語力</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JTEからのフィードバックがない</li> <li>・ 英語力</li> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他教員との距離</li> <li>・ 控えめな性格</li> <li>・ 他教員の関心の無さ</li> <li>・ コミュニケーション不足</li> </ul>
H	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TT授業力の不足</li> <li>・ 教科書に焦点を当てすぎた授業</li> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コミュニケーション不足</li> <li>・ 距離感・非社会的な態度</li> <li>・ 生徒指導の不十分さ</li> </ul>
I	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科書に焦点を当てすぎた授業</li> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 授業中の放置</li> <li>・ TT授業力の不足</li> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ あいまいな返答</li> <li>・ 非友好的な態度</li> <li>・ 生徒指導の不十分さ</li> <li>・ コミュニケーション不足</li> </ul>
J	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業中の生徒指導観の違い</li> <li>・ 教科書に焦点を当てすぎた授業</li> <li>・ Human Tape Recorder</li> <li>・ 英語力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒指導の不十分さ</li> <li>・ 英語力</li> <li>・ 相談しても何もしない</li> <li>・ あいまいな返答</li> </ul>

「授業」におけるJTEへのフラストレーションの要因は、「授業」の中でのALTの扱いについて、【Human Tape Recorder<sup>1</sup>】や【授業中の放置】のようにALTを授業の中で活用できていない状況の言及が10名中7名にあり、【TT授業力不足】を感じている協力者もいる。また、【教科書に焦点を当てすぎた授業】を行うJTEにフラストレーションを感じているALTもいる。

また、7名が【授業中の生徒指導観の違い】をあげている。大谷(2007)もALTが戸惑いを感じる一要因にあげているが、生徒指導観の違いについて、今回の協力者も、「母国では、教室内に騒々しい生徒や授業を妨害する生徒がいる場合、教室の外に立たせたり、放課後の居残り、副校長室行き、ひどい場合は停学措置等の厳しい処置をとるが、日本では注意するだけに留まっている。(協力者B)」と述べている。これに関して、『JET参加者用ハンドブック』(2013)には以下のような記述があり、ALTに日本の生徒指導観を受け入れることを促していることが分かる。

JTEの生徒指導の方法は、ALTの母国のそれとは、異なり得る。ALTは時間をかけて、JTEの生徒指導の方法に慣れるように努めるべきである。(中略)日本では、重要な原則の一つに、生徒全員が授業を受ける権利があるという原則がある。必然的に、JTEはどれだけ妨害的な言動であろうと、教室外に生徒を出させることは容認できないものである。

(『JET参加者用ハンドブック』(2013:57)筆者訳)

「授業外」におけるJTE・教員へのフラストレーションの要因は、【生徒指導の不十分さ】と【相談しても何もしない】に6名が言及した。【生徒指導の不十分さ】に関しては、「授業」に関するフラストレーションでもあがったように生徒の不適切な言動や授業の妨害への注意がALTの母国に比べて甘いという意見が多かった。また、生徒たちのALTへの不適切な言動に関してJTEや他教員からの注意がないことや、生徒の不適切な言動に関する【相談をしても何もしてくれない】教員に不満をもっている。

【英語力】に関しては、「授業」でも5名があげていたが、「授業外」におけるフラストレーションにおいても3名が【英語力】を、4名が【コミュニケーションの不足】をあげている。コミュニケーション不足から生ずる【他教員との距離】にフラストレーションを感じているALTもいる。JTEまたは、他教員の【ALTへの無関心】な態度や【非社会的】【控えめな性格】にALT達は不満を感じている。

以上であげられたフラストレーションにALTたちはどのような見解を持っているのか、また、具体的にどのようなことに苦勞し工夫しているのかについて述べる。調査対象者によって、フラストレーションの実態の背景や要因が異なることから、協力者ごとに考察し、ここでは、対照的な例として協力者Bと協力者Cを取りあげて述べる。

#### ①協力者Bの場合

協力者Bが「授業」に関するフラストレーションの要因にあげたのは、【授業中の生徒指導観の違い】【Human Tape Recorder】【急な依頼・変更】であった。【生徒指導観の違い】は多くのALTも言及しており、“difference between Japanese equality and western equality”(日本の平等観と西洋の平等観の違い)を指摘している。彼らが指摘するのは、日本は全員に教育の機会を与えるという平等観を持っており、西洋では勉強を望む生徒の権利を守るため、その権利を侵害する生徒は厳しく罰せられるという姿勢を持っている点である。日本の学校教育に関することであり、フラストレーションを感じても、ALT達はただ不満に思うしかないのが現状である。

協力者Bの大きなフラストレーションは、“A lack of respect and a lack of communication. These are

two big problems.”(リスペクトの不足とコミュニケーションの不足が大きな2つの問題だ。)と言うように、【JTEや他教師の無関心】、人によっては【敬意のない態度】と【コミュニケーション不足】である。JTEや他教員の態度が生徒たちに悪影響を及ぼしていることを懸念している。【ALTへの無関心】が生む【コミュニケーション不足】と【敬意のない態度】は生徒たちの良いお手本とはならず、生徒もまた敬意のない態度を表し、【生徒指導の不十分さ】がますます問題をエスカレートさせていると考えている。Bには、心を開いて会話できる教員が数名いるが、学校・職員室の雰囲気が原因で、その教員たちとの会話も学校外、または、職員室にあまり教員がいない時になるという。これらが悪循環を生み、結果的に“Because I can't communicate with other teachers, I don't think about work much. I think about other things.”(他の教員と会話ができないから、仕事のことはあまり考えない。他のことを考えている。)と学校に関する問題から目を背けることが得策だと考えるようになっている。

「JTEなら、ALTに何をしてあげるか」という問いに、“JTE can be like a bridge between not just other teachers and me, also other students. …I think that JTE have a very important role to play in helping people communicate.”(JTEは他教員や生徒との架け橋のような存在になり得る。JTEは他の人とのコミュニケーションを助ける大事な役割を持っている。)と述べている。協力者Bにとって、JTEは他の教員や生徒との関係を左右する非常に重要な存在であるが、現状では十分に機能していないとらえている。

## ②協力者Cの場合

協力者Cの「授業」に関するJTEへのフラストレーションは【Human Tape Recorder】【教科書に焦点をあてすぎた授業】【授業中の放置】等である。これらは主に一人のJTEに当てはまることであり、そのJTEに関して「年配」「忙しい」「英語が不十分(留学経験なし)」という原因をあげている。しかし、Cは決してこのJTEと険悪な関係にあるわけではなく、他のJTEとも良好な関係にあり、“Best friend”(親友)と呼べるほど仲の良いJTEも多くいる。その内の一人のJTEを「年齢が近い」、「学校外においても交流機会が多く」、アクティビティーを協働で考える等「ALTを授業でよく活用する」と述べている。また、JTEとの良好な関係の一番の利点として、学校内や授業中にジョーク等を言い合うことで生徒にALTとの関係の良さが伝わり、生徒たちもALTとの交流を楽しむという相乗効果を生んでいることをあげている。JTEとの関係を築くに当たって年齢や忙しい等で交流の機会を設けられないことは仕方ないが、“I think JTEs should have meetings with ALTs, maybe once a week…That way ALTs always feel needed in the classroom.”(JTEはALTと週に一回くらい打合せをした方がよい。(中略)そうすれば、ALTが教室内で必要とされていることを感じられる。)と述べるように、JTEがALTとのコミュニケーションの機会をいかに設けるかが関係を建設的に築き、TTを成功させるための鍵になるのではないだろうか。

一方で、協力者Cは、生徒や教員と良好な関係を築くために、「JTEへの積極的な協力の申し出」【“approachable”(関わりやすい存在であること)】「常にフレンドリーに声をかける」等の様々な努力も行っている。このようなALTからの積極的な関わりも良好な関係の重要な要因になっていることが分かる。

## 5.2 児童・生徒に対するフラストレーション

次に、児童・生徒に対して感じるフラストレーションの要因をインタビュー調査の結果をもとに表3にまとめる。「児童・生徒に対するフラストレーションの要因」の結果は、生徒自身が原因でALTが感じるフラストレーションと他の要因によって引き起こされた生徒との関係を築く上でのフ

表 3. 児童・生徒に対するフラストレーションの要因

調査協力者	フラストレーションの要因
A	・敬意のない言動 ・不適切なボディータッチ ・児童・生徒の pack mentality <sup>2</sup>
B	・敬意のない言動 ・不適切なボディータッチ ・児童・生徒の pack mentality
C	・間違いを恐れている ・授業の妨害 ・児童・生徒とのコミュニケーションの機会の少なさ
D	・敬意の無い言動
E	・児童・生徒とのコミュニケーションの機会の少なさ ・敬意のない言動 ・授業の妨害
F	・授業の妨害
G	・授業の妨害 ・敬意のない言動 ・1クラス当たりの人数
H	・敬意の無い言動 ・英語への無関心 ・授業の妨害 ・間違いを恐れている
I	・敬意の無い言動 ・不適切なボディータッチ ・授業の妨害 ・児童・生徒とのコミュニケーションの機会の少なさ
J	・敬意の無い言動 ・授業の妨害 ・間違いを恐れている ・不適切なボディータッチ ・英語への無関心

ラストレーションの2つに分類することができる。

児童・生徒自身が原因で感じるフラストレーションとして、今回の調査で、児童・生徒の【敬意の無い言動】、【授業の妨害】は協力者全員が言及した。【敬意の無い言動】に関しては、生徒からの敬意がないと断言できないような現状、例えば、【不適切なボディータッチ】に不満を持っているALTもいれば、「日本語または、英語での悪口」等のように明らかにALTに対して敬意を示していない言動にフラストレーションを感じているALTもいる。【不適切なボディータッチ】に関して、『JET参加者用ハンドアウト』（2013：56）には、「この場合、大きな声で、厳しく「No」や「だめ！」と伝えるべきである。」と書かれている。【不適切なボディータッチ】は今回の協力者たちだけではなく、一般的にALTのフラストレーションとしてあげられていることが分かる。

児童・生徒等の性格に関する特徴に関するフラストレーションとしては、授業中に【間違いを恐れている】様子が戸惑いを感じている。授業中のALTとの交流にも消極的になってしまう状況を、“I think they are afraid of making a mistake, because they think of the conversation with me as like a test.”（生徒たちは、私との会話をテストのように考え、間違いを恐れている。）と述べるように、「常に

成績を気にしている(協力者C)」と考えるALTもいる。また、“The atmosphere in English classroom, I think, is not open enough, so many Japanese students are scared of making mistakes.”(英語の授業の雰囲気オープンではないことが原因で生徒たちは間違いを恐れている。)(協力者B)と述べ、授業中のクラスの雰囲気に関して言及する協力者もいる。

これらのフラストレーションに対するALTの見解や苦勞、または工夫について、協力者BとCを取りあげ、インタビュー調査で得た具体的な回答をもとに考察する。同時に、JTE・他教員に対して感じるフラストレーションと児童・生徒に対して感じるフラストレーションとの関連について考察を行う。

### ①協力者Bの場合

協力者Bは、【不適切なボディータッチ】や【児童・生徒のpack mentality】に関するフラストレーションを抱えている。しかし、協力者Bにとっての一番のフラストレーションは生徒の【敬意のない言動】である。Bの学校の生徒は、“They see me as a something make fun of.”(生徒らは、私をバカにする存在と思っている。)と述べるように、Bをバカにするような態度をとることや、“Students ignore me. Students don’t think of me as a teacher, they see me as a game or toy.”(生徒は無視し、わたしを先生と思っておらず、ゲームやおもちゃのように思っている。)と述べ、生徒らの【敬意の無い言動】にフラストレーションを感じている。また、“They don’t see you with the same respect as other teachers.”(生徒たちは、他の先生に対しての敬意がALTに対してはない。)と、このような【敬意の無い言動】がALTのみに対するものであることに非常に不満を抱いている。

協力者Bは、「JTE・他教員に対して感じるフラストレーション」に対して、【ALTへの無関心さ】、【敬意のない態度】、「授業外」の【生徒指導の不十分さ】を不満に思っていることを前述したが、これらのJTEや他教員の態度が生徒の【敬意の無い言動】に悪い影響を与えていると考えている。協力者Bの見解では、教室外、職員室でのJTEや他教員のALTに対する【無関心さ】や【非社会的な態度】が生徒のネガティブな見本になり、生徒の不適切な言動を誘発し、それに対して【生徒指導の不十分さ】や“I’ve never got helped.”(助けてもらったことが無い。)と述べるように、【相談しても何もしてくれない】という現状にある。そのようなJTEや教員の【生徒指導の不十分さ】が生徒らからのBへの【敬意の無い言動】をより悪化させるという悪循環にあると考えている。このような見解に至るという現状がいかにJTEや他教員が協力者Bにとって信頼できない存在であるかを物語っている。5.1でも述べたように、協力者Bは、教員や生徒との関係作りに関して意欲を失い、“I don’t think about work very much.”(仕事のことはあまり考えていない。)と述べ、仕事に関してあまりモチベーションが高くないことが伺える。

### ②協力者Cの場合

協力者Cは、“I found it very frustrating sometimes, because I know there are very smart students in the class and really want to learn and I want to teach them.”(時々妨害的な生徒に対してフラストレーションを感じる。なぜなら、賢くて、勉強をしたいと思っている生徒がいることが分かっているからだ。)と述べ、【授業の妨害】で勉強したい生徒が勉強できないという状況にフラストレーションを感じている。しかし、妨害をする生徒に対して、“Once I sort of made an effort to work for that students to get to know them and have fun with them, then they started to like me.”(そのような生徒のことを知ろうと努力したり、一緒に楽しんだりする努力をすると、彼らは私のことを気に入り始めた。)と述べるように、積極的に生徒のことを知ろうと努力している様子が伺える。協力者Cは、JETプログラム参加以前に、「学習障害をもつ生徒の支援」の経験があり、“I think that help a little to try to



understand trouble students.” (経験が問題行動を起こす生徒を理解する助けになっている。)と述べているように、現場での経験が役に立っていることが分かる。ほかにも、JTEの【授業中の放置】の状態でも、Cは生徒に積極的に関わろうとしている。日頃からJTEや他教員、生徒たちへの積極的な声掛けを心掛けており、“I think the most important thing is to talk with them outside of class. I always say hello to all students and teachers.” (一番大事なことは、教室外での声掛けだと思う。私は、いつも生徒や教員に声をかけている。)と述べ重要視している。

また、協力者Cは、教員にも生徒にも“Being approachable” (話しかけられやすい存在)であることも心掛けている。その成果もあってか、教員・生徒との関係は良好であると考えている。それに加え、前述したように、“If the students see you having fun with a JTE in a class, first they’ll respect you, because they see you as the same level of as the teacher.” (もし生徒がJTEとALTが授業の中で楽しんでいる姿を見れば、彼らは教師と同じとみなし、リスペクトし始める。)と話すように、JTEのALTへの態度が生徒たちのALTへの態度に影響することを述べている。

また、協力者Cは、【児童・生徒とのコミュニケーションの機会の少なさ】に対して不満を持っている。複数校への勤務によって十分にコミュニケーションがとれていないと考えていること、また、Cの学校では3年生の授業にALTは関与しておらず、2年生の時に仲良くなった生徒たちに3年生になると会えないということの二つにフラストレーションを感じている。しかし、協力者Cは、“letter box” (手紙箱) を作り、手紙を通してコミュニケーションを図っている。このように生徒とのコミュニケーションの機会を作り出す独自の工夫がみられる。

以上のように、協力者Cは教員とだけではなく、生徒ともコミュニケーションをとるために様々な努力、工夫を凝らしている。それに応えるようにJTE側も積極的に関わり、JTEに影響された生徒もCとの良好な関係に寄与していることが分かる。

児童・生徒との良好な関係作りに教員、特にJTEの存在は非常に大きいとALTが認識していることが、協力者のALTへのインタビュー結果から明らかになった。また、どちらか片方ではなく、ALT側の様々な工夫や努力にJTEや他教員が応えるというような両者の働きかけ、両者の信頼や連携が必要不可欠であるのではないだろうか。

### 5.3 フラストレーションの解決に向けて

インタビューの中で、教員や児童・生徒に対して多くのフラストレーションを抱えて苦悩し、悪循環の中で解決をあきらめているという答えもあったが、多くのALTは教員との関係を良好に築こうと、教室外での声掛けを心がけコミュニケーションを促進するなど、さまざまな努力や工夫をしていることも明らかになった。児童・生徒に対する【コミュニケーションの機会の少なさ】などは学校のシステム上の問題であり、ALT個人で状況を変えることは難しいが、「手紙箱」のようにコミュニケーションに積極的な姿勢を保ち実践をしているALTは、実際に良好な関係を築いているという事例から、ALT側の働きかけが状況を改善していることが分かる。また、授業でのフラストレーションは、JTEの【英語力】【TT授業力不足】によるものであり、JTE個人の努力を要することである。しかし、ALTがJTEの英語力を理解した上でJTEの英語力向上に寄与することや、TT授業を計画する際にも積極的に関わることなど、ALTが「自分にできること」を考え実行する姿勢を心掛け、ALT側からも状況を改善するための働きかけを積極的に行うことは重要であろう。一方で、ALTはJTEが他教員や児童・生徒との架け橋になる重要な存在であると認識している。JTEは積極的にALTとコミュニケーションをとる努力するなど、ALTとの関係作りに積極的な態度を示し、実行することが建設的な関係作りにとって最も重要であると考えられる。

教師は多忙でTTやALTとのコミュニケーションの取り方に関する知識や実践経験を積むことが

難しい現状である。ALTと良好な関係を築き効果的な授業を行うためには、例えば、大学の教員養成課程においてALT等の英語母語話者とのTT授業づくりの基礎を学ぶことや実戦経験の場を設けることも有効ではないだろうか。フラストレーションの解決をJTE頼みにするのではなく、ALTからも積極的に働きかけることに加え、今井・松井(2008)が述べるように、ALTとJTEの双方が児童・生徒と直接交わり、英語力や教室での様子を理解するような児童・生徒の自立を支えるチーム作りを良好に行うことが授業でのTTを成功に導く関係性に繋がるであろう。その関係作りを両者が意識することが大切であると考え。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、ALTが周囲の教師や生徒と関わる上で抱えているフラストレーションの実態を明らかにすることを目的として、香川県のALTを対象にインタビュー調査を行い、分析を行った。その結果、ALTが教師に対して感じるフラストレーションは、「TT授業力の不足」や「Human Tape Recorder」に代表される「授業」に関わるフラストレーションや「生徒指導の不十分さ」や「相談しても何もしない」に代表される「授業外」でのフラストレーションがあげられた。また、児童・生徒に対して感じるフラストレーションは、「敬意の無い言動」や「授業妨害」に代表される児童・生徒自身へのフラストレーションや、「コミュニケーションの機会の少なさ」などの他の要因によって引き起こされた児童・生徒との関係を築く上でのフラストレーションがあげられた。さらに、これらの児童・生徒自身が原因で感じるフラストレーションに関しても、「不十分な生徒指導」、「敬意の無い態度」や「相談しても何もしない」といったJTEや他教員の態度が、生徒のALTへの態度に大きく影響するとインタビュー調査の協力者であるALTは認識していることが明らかになった。

フラストレーションを抱えて苦悩し、悪循環の中で解決をあきらめるケースもみられたが、多くのALTは教員との関係を良好に築こうと、さまざまな努力や工夫をしていることも明らかになった。ALTは、JTEが他教員や児童・生徒との架け橋になる重要な存在であると認識している。JTEもALTとの関係作りに積極的な態度を示し、実行することが建設的な関係作りにとって重要であり、両者が関係作りを意識することが大切であると考え。

今回の調査は、インタビューの調査協力者が10名と少ないために、調査で得た結果の考察を一般化することは難しい。そのため、さらに調査協力者を増やし調査を行うべきである。また、調査対象者がALTのみであったために、JTE、他の教員や児童・生徒がALTにどのようなフラストレーションを抱えているのか、また、良好な関係作りにどのような努力・工夫をしているのかは明らかになっていない。JTE等にも調査を行い、結果を合わせて分析することが、課題の解決には必要である。さらに、縦断的な調査も行い、ALTのフラストレーションへの意識の変化を調査していく必要があるだろう。これらについても今後の課題としたい。

謝辞 調査にご協力いただきましたALTや関係者のみなさまに感謝申し上げます。

## 【注】

<sup>1</sup> ALTが英単語等を発音するだけに用いられること。(『JET参加者用ハンドブック』2013)

<sup>2</sup> “Pack mentality”とは、協力者A曰く、児童・生徒が授業中に周囲の生徒に合わせて行動する様子を表している。

## 参考文献

- Aihara Kazue (2007) “How to Interact with Assistant Language Teachers”『茨城キリスト教大学紀要』第41号, 1-12.
- CLAIR (2013) “2013 General Information Handbook”『JET参加者用ハンドブック』
- Kobayashi Junko (1994) “Overcoming Obstacles to Intercultural Communication: AETs and JTEs.” *Studies in Team Teaching*. Ed. Minoru Wada and Antony Cominos. Kenkyusha, 162-177.
- Kushima Chizuko・Nishihori Yuri (2006) “Reconsidering the Role of the ALT: Effective Preparation for ALTs Based on the Questionnaire, Survey” *ARELE*, Vol.17, 221-230.
- Mahoney Sean (2004) “Role Controversy among Team Teaching in the JET Programme” *JALT Journal*, 23 ( 2 ), 224-244.
- Ministry for Education, Culture, Sports, Science and Technology (2002) “HANDBOOK FOR TEAM- TEACHING REVISED EDITION” Gyosei Corporation.
- Rosati Simon (2005) “The JET Programme and Culture Shock”『龍谷大学国際センター』第14巻, 98-115.
- Tsuido Kazuaki (1997) “An Analysis of Assistant Language Teachers’ Perception of School-Related Cultural Problem” *ARELE*, Vol.8, 61-70.
- Tsuido Kazuaki・Otani Midori・Davies Walter (2012) “An Analysis of Assistant Language Teachers’ Perception of their Working Relationship with Japanese Teacher of English”『広島外国語教育研究』, 49-64.
- 浅井亜紀子 (2003) 「本国でマイノリティであった「外国語指導助手」の文化的アイデンティティ-学校文化との出会いによるゆらぎ-」『異文化コミュニケーション』異文化コミュニケーション学会, 第6号, 63-81.
- 足立和美・戸田有一 (1996) 「ALTによる英語教育に対する学習者の取り組みと評価・認識:鳥取県東部の中学・高校生を対象とした調査より」『鳥取大学教育学部研究報告. 教育科学』第38号, 2号, 177-192.
- 今井裕之・松井かおり (2008) 「ALTとの授業がうまくいく関係性とは」『英語教育』第57巻, 2号, 15-17.
- 上原京子・レイモンド B. フーゲンブーム (2009) 「「日本人教師」と「英語を母語とするALT」とのティーム・ティーチング:異言語間・異文化間の意思疎通における課題」『群馬大学教育実践研究』26, 77-88.
- 大谷みどり (2007) 「外国人指導助手 (ALT) と日本の学校文化:日本人教員とALT間における異文化的要因」『鳥根大学教育学部紀要. 教育科学. 人文社会科学. 自然科学』41, 105-112.
- 小串雅則 (2008) 「JETプログラムの「これまで」と「これから」」『英語教育』第57巻, 2号, 10-14.
- 國方太司 (2008) 「小学校英語活動でALTをどう活かす?」『英語教育』第57巻, 2号, 25-27.
- CLAIR (2003) 『2003 JET参加者生活実態調査結果』
- CLAIR (2011) 『JETプログラム担当者用ハンドブック』
- 佐藤秀志 (1987) 「外国人講師導入の問題点」『英語教育』第36巻, 4号, 16-18.
- JETプログラム基本問題検討会 (2001) 『JETプログラムのさらなる充実と発展に向けて』JETプログラム基本問題検討会
- 高塚成信 (1987) 「外国人講師との授業-その課題-」『英語教育』第36巻, 4号, 19-21.
- 布川裕行 (2012) 『英語授業ハンドブック<高校編>』金谷憲編集代表, 大修館書店, 120-126.
- Benesse 教育研究開発センター (2009) 『第一回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】』ベネッセコーポレーション
- 森住衛 (1989) 「外国人教師との Team Teaching -その効用と問題点-」『英語教育』第37巻, 13号, 24-27.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』開隆堂
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
- 文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂
- 山田兼尚 (1998) 「中・高等学校における JET プログラムの現状と課題-生徒調査の結果から-」『国立教育研究

所広報第114号』国立教育研究所

レオナルドT.J.(佐藤ちえり訳)(1994)『ティーム・ティーチング成功の秘訣』,大修館書店

和田稔(1991)『国際協力の狭間で 英語教育と異文化理解』研究社

参考URL

外国語能力の向上に関する検討会「国際共通語としての英語能力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」(2011)

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf)  
(2014/11/26)

JETプログラム Official Homepage of The Japan Exchange and Teaching Programme

<http://www.jetprogramme.org/index.html> (2014/11/26)

総務省「平成24年度JETプログラムの概要」(2012)

[http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01gyosei05\\_02000027.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei05_02000027.html) (2014/11/26)

ベネッセ教育総合研究所「小学校英語の実態(2)英語教育の指導者はだれなのか」(2006)

[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2006\\_07/ren\\_kutsuzawa\\_03.html](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2006_07/ren_kutsuzawa_03.html) (2014/11/26)